

芸術研究報 40 抜刷

Bulletin of Faculty of Art and Design, University of Tsukuba

震亜図書館の書法出版にみる李瑞清の参画

—上海流寓遺老の売芸戦略—

菅野智明

2019

筑波大学芸術系研究報告 第75輯

2020年2月20日

筑波大学芸術系

震亜図書局の書法出版にみる李瑞清の参画

—上海流寓遺老の売芸戦略—

菅野 智明

はじめに

清末から中華民国期にかけて、石版印刷のみならずコロタイプ印刷の技術を獲得し、精緻な写真印刷を可能としていた中国の出版界にあっては、書画碑帖といった古美術品の影印複製を新規の出版コンテンツとして有望視していた¹。こうした状況下、辛亥革命を機に上海へ流寓し、書家として名を馳せた李瑞清（1867-1920）は、当地の出版社・震亜図書局（以下「震亜」と略）の書法関連の出版に積極的に携わっていった。時の書画碑帖出版に、古美術収蔵家のみならず、第一線の作家として活躍する書家たちが与することは、彼等書家における活動形態の拡充・変容を窺う上でも注目されるが、ただし李と震亜の関係をめぐることは、これまで十分に回顧されることはなかった。

この点に鑑み、稿者は旧稿において、革命後の上海における李と著名人士との交流を跡付ける中で、震亜の出版に携わった主要書家を洗い出す（この点に関する旧稿を以下「旧稿1」と称す）²とともに、震亜が影印出版した一部の李の書法作品に基づき、李が震亜の出版企画を主導する一面を明らかにした（これに関する旧稿を以下「旧稿2」とする）³。更に、これら書法出版物が、李や彼の招きで上海に寓居した曾熙（1861-1930）をはじめ、彼等に縁の深い書家たちの潤例（書作品揮毫の形式別価格表）を頻繁に附載することに着目し、特定の書家一派の勢力・影響力が一出版社に深く及ぶ事態は、時に稀な例と捉えた（これについては以下「旧稿3」）⁴。その特殊性は、時の書画界における結社のあり方や、出版界との結び付きが、多様な相を見せるが故の帰結と解したのである。

これら旧稿の時点では、李・曾をめぐる諸資料の整備は未だ覚束ない状況にあり、震亜の書法出版物の過眼もごく一部に限られていた。ところが近年、曾迎三氏や王中秀氏の尽力により、李・曾の詳細な年譜が編まれた⁵ことに加え、公丕普氏が震亜の書法出版物を対象とした専論を著した⁶ことにより、局面は一変しつつある。特に公氏は、従来殆ど知られていなかった震亜とその経営者・朱挹芬（1879-?）⁷の来歴を明らかにするとともに、往時の『上海総商会商業図書館図書目録』により震亜の60種に及ぶ書法出版物を一覧にし、その傾向の分析にも着手された⁸。これら先学の成果は、稿者の如上旧稿に少なからず訂正を求めるものでもある。

さて、公氏の指摘として特筆すべきは、震亜と李をはじめとする書家たちとの関係について、彼等書家の供する「出版資源」に依存する震亜と、震亜の援護によってその名を市場に広める書家との「互嬴」「双嬴」（win-win）と見做し、それが時の書法出版における「典型意義」を有する一つの「縮影」（縮図）と捉えられる点である。公氏は有正書局といった大手出版社の事例も引き合い

に、震亜が大手と異なる「自由靈活」な経営モデルを確立したとされるが、そのモデルについては上記の如く民国期の書法出版における「典型」「縮影」として一般化させるようである。

だが、一口に「互嬴」「双嬴」といっても、やはり震亜の場合は独自色が際立っており、稿者はこうした震亜の独自性を重視することこそ、時勢に応じ刻々と新たな態様を生み出す時の出版界、延いては書画界の特質に迫り得るものと考えている。この点を踏まえ、本稿では震亜への李の参画のあり方が何故特異なままであり続け、出版界で相応の普及・展開を見なかったか、という問題を改めて検討することにしたい。如上の旧稿1～3では、この点を深く掘り下げられず、特に旧稿3で予測した時の書画界の「多様な相」については、具体的な明示に至らなかった。本稿ではその検討を通して、震亜に個性をもたらした時の出版界・書画界の動向も注視してゆこうと思う。

この際、李・曾をはじめ特定の書家たちが震亜に集った現象は、専門的な書画家たちの集団、所謂「書画社団」の形成といった視点からも興味を惹かれるところである。喬志強氏は、出版社を拠点とする書画社団を「編集部模式」という括りで類型化されるが⁹、震亜に集った書家たちはこれに相当する集団として特筆される。加えて留意すべきは、これら書家の一部が曾の歿後、李・曾を顕彰した「曾李同門会」を設立したという事実である¹⁰。震亜への着眼は、かかる同門会の設立前史研究のとしての側面を持つ。

以上を踏まえ、本稿では、先ず震亜に集った書家たちの中でも、やはり李瑞清が草創期から最も主導的な立場にあり、独自の書法出版物の開拓と、曾をはじめとする書家たちの結集に尽力したことを改めて確認したい（第1章）。それを踏まえ、かかる震亜の独自性が李の置かれた往時の境遇・環境に由来することを導くとともに（第2章）、最後に、震亜が書法出版を軌道に乗せて以降も、そのあり方が同業他社に容易に拡散しなかった背景について探ってゆくことにする（第3章）。

1. 臨学に根差した一派の喧伝

(1) 書法出版物の実際に見る李と曾

旧稿3では、李が震亜で自作の書法作品を出版したのは、現代書家による初学者向け書き下ろし手本で新たな市場を開拓しようとする朱の思惑に由来するものと推測した。それとともに、李や曾は朱の「おかかえ」揮毫者・編集企画者として、震亜の書法出版を主導した側面を見通した。この際、朱と李の関係にあっては、李の朱宛の書簡¹¹から、李の側に具体的な書法出版の構想があり、朱がそれを具現化する一面があったことを指摘したが、問題は曾が震亜に参画してからの李の立ち位置である。

この点について、本稿は、曾の加入があっても書法出版にかかる李の強い主導権は依然堅持されていたことを導く。更に言えば、李は一般的な学書者へ広く臨学の具体的な方途を示しつつ、李や曾の作風をも披瀝することにより、李・曾の作品原件自体の販促を期していたのではないか。このあたりに、震亜の書法出版の核心的な部分が潜むように思われる。こうした李・曾の売芸における販路拡大の目論みを李の側に見出すためには、震亜の出版物の更なる網羅とその分析が必要となろう。差し当たり以下では、公氏が掲げる震亜の書法出版物目録に加え、管見の及んだ出版物・出版目録を加えた一覧に基づき、その傾向の分析から、李の具体的な主導のあり方を窺うことにする。

本稿末尾の【表1】は、震亜の書法出版物と目される130余件を一覧にまとめたものである。「凡例」のとおり、これらは未刊や他社刊を含む可能性があり、また、複数の出版物の合冊本を別タイトルとするなど、実態との若干の乖離も予測される。しかし、上掲の公氏論文所収目録を震亜の実態に直結させることが早計であることは、容易に了解されよう。一方の【表2】は、【表1】の各出版物を責任者（当該出版物の揮毫者、古典の場合は所蔵者・審定者）別にその件数と比率を示したものである。その主たる責任者は、以下のようになる。

まずは、李と曾である。両者連名の出版物も散見することから、ここでは、両者の双方または一方のいずれかを責任者とするもので大きく括った。次に譚延闓（1880-1930）、澤闓（1889-1947）兄弟の所蔵古典。特に所蔵の錢澧の作品は圧倒的な数を誇り、譚氏所蔵の明記がない錢澧作品も便宜的にここへ含めた。最後に李宗瀚（1769-1831）の旧蔵古典7件。これも一定数に上るものとして一枠を設けた。この他、【表1】では責任者として名の挙がる人士は多数に上るが、概して2、3件の出版物にその名を留めるに過ぎず、これらは「その他」として一括した。

一方【表3】は、李・曾を責任者とする出版物の内訳を揮毫作品と審定・所蔵古典に分け、更に揮毫作品は臨書と創作等（創作等では、碑誌銘の揮毫が一定数備わることから、これを別枠とした）に分けたものである。

先ず【表2】において改めて銘記すべきは、李・曾を責任者とする出版物がほぼ半数を占めるという事実である。少なくとも出版種数の点からは、李・曾が双壁をなして圧倒的な存在感を放っていたことが知られる。ただし、【表3】における臨書、創作（碑誌も含め）、そして審定・所蔵古典の各項では、李・曾が個別に携わった出版物の数は、両者ほぼ拮抗の状態と言ってよく、いずれかに大きく偏ってはいない。出版種数から李のみの傑出は導けないのである。この点を踏まえ、敢えて李の側の強い主導権を導くとするなら、特に曾との対比を主とした

新たな視点を据える必要がある。

その視点の一つとして、両者の臨書作品に焦点を当てたい。両者の臨書作品数は、ほぼ拮抗しているが、問題は両者が対象とした古典である。李の場合、17（以下、各出版物は【表1】の整理番号で表記）において各種歴代古典の節臨を試みている他、12（礼器碑）、22（張遷碑）という漢碑の臨書が見られ、13では、爨龍顔、鄭羲下碑、中嶽嵩高靈廟碑、崔敬邕墓誌の節臨も手がけている。こうした六朝碑の臨書が後に93、118、119とシリーズ化されており、この他にも内訳は不明だが41、42のような六朝碑の臨書例も見られる。また、53のような金文の臨書が備わることも目を引く。一方の曾は、漢碑について17（西嶽華山廟碑）、64（夏承碑）等を取り上げるが、その他、18（鍾繇・王羲之・王献之¹²）、73（黄庭経）といった魏晋の法帖や、19、20の唐碑もあることは、李と色合いを異にする。もっとも、26の瘞鶴銘や28の蘭亭は李も臨書するところだが（李の瘞鶴銘臨書は34、125）、曾の側に南帖への傾斜が認められることは確かである。

以上にみる両者の臨書古典は、興味深いことに、李が曾のために寄せた「衡陽曾子緝書直例引」（1916年1月）¹³の内容と顕著な呼応を見せる。「書書」とは書作品を売ることで、「直例」は潤例であり、即ち李のこの文は、曾の潤例へ寄せた序文である。その一節に「今年八月、曾季子出游西湖、遠來視余、余因止之、留滬上以書書」¹⁴とあるように、曾の上海入りは、「今年」つまり1915年の8月であり、李の薦めで書書を生業としたのだった。李はこの文で、かつて曾とともに臨学に打ち込んだ日々を以下のように綴っている（下線は引用者）。

余喜学鼎彝、漢中石門諸刻、劉平国、裴岑、張遷、礼器、鄭道昭、爨龍顔之属、自号北宗。季子則学石鼓文、夏承、華山、史晨、太傅、右軍、太令、尤好鶴銘、般若、自号南宗、以相敵。

ここでは、両者がそれぞれ「北宗」「南宗」という対比的な作風を形成したことについて、その作風形成に資した主要な古典とともに回顧されているが、そのうちの下線は、上記した両者の臨書出版物で名の挙がった古典と合致するものである。それがこの文中の所掲古典において高い割合を占めるという事実は見逃せない。

翻って、李の「書直例引」は、曾の上海における書書を懲進する李が、曾の書を喧伝し、その書書が軌道に乗ることを期して寄稿されたと考えられる。その一節で列記された両者の作風形成にかかる主要古典の多くは、震亜から臨書作品として出版され、可視化された実例を伴うことになった。この事実は、震亜における一連の古典臨書の出版が、曾のみならず李も含め、両者の作風形成のあり方を如実かつ広汎に示す機会として利用したこ

とを物語るものであり、延いては、それらの出版に当初から両者の鬻書の成功が企図されていたことを示すものでもあろう。

この推測は、両者の臨書の出版時期からも、ある程度裏付けられる。上掲の各種臨書出版物の整理番号を見るなら、20番代まで、つまり1916年という曾が鬻書を始めて間もない頃のものがある割合を占めている。かかる出版と鬻書の即応・連動には、先ず鬻書ありきの発想から当該の臨書の出版が企画されたという因果関係が容易に見通せる。こうした発想は、後から上海へ招かれた立場の曾が主導したとは考え難く、既に震亜との関係を築いていた李の主導と見る他はない。少なくとも曾の上海入り直後の1916年の各種出版物は、曾の作風を熟知する李のお膳立てと見るべきで、しかも李自身の「北宗」たる作風にかかる臨書もこの折に集中して出版されていることから、李は曾も加えた双頭体制による鬻書の喧伝を期したと察せられる。

(2) 李と参集書家との結縁

震亜の書法出版に、揮毫作品や所蔵古典の提供等で携わった書人は曾の他にも多数に上る。この節では、それぞれの書人がいずれも李と深く結び付き、李が震亜への人材供給の面でも主要な役割を担っていたことを示してゆきたい。これら参集書人には、幾つかの共通点が認められるようである。

先ず、【表2】の責任者として李・曾に次ぐ位置を占める譚兄弟に注目しよう。彼等（特に弟の澤闔）が錢澧作品の収蔵家として知られることは旧稿1で示したが、その後、李が彼等と本格的に交わるのは1915年10月であったことが判明した¹⁵。この折、李は上海入り直後の曾とともに、既に上海に寓していた彼等兄弟のもとを訪れ、旧交を温めた。元来、兄の延闔は曾とともに郷里の湖南省で革命を挟み清末民初の省政の要職にあったが、第二次革命の失敗を機に譚兄弟と曾は相次いで上海入りを果たすことになる。ここから李・曾・譚兄弟は更に親交を深めてゆくが、1915年10月の段階について言えば、彼等を震亜へ引き寄せる力は、移居間もない曾よりも李に存したと察せられる。

さて【表2】では、以上の他に李宗瀚の旧蔵品を特記した。瑞清が宗瀚とともに「臨川李氏」の一族であることは周知の事実で、ここでは改めて触れないが、旧稿1を些か補足すれば、この折に宗瀚旧蔵品を継いだのは李翊煌（1849頃-1916頃）である¹⁶。一連の名宝の影印には、瑞清の翊煌への働きかけがあったと見てよい。この他、【表1】では2、3件ながら責任者として名を冠する書人が散見する。具体的には24・25・28の鄭孝胥（1860-1938）、36・37の惲毓嘉（1857-1918）、48・88の鄭文焯（1856-1918）、95・96・97の徐乃昌（1866-1946）、106・

107の胡光燾（1888-1962）である。このうち、鄭孝胥、鄭文焯、胡光燾と李との関係については旧稿1で概観したが、新たに得た知見を加えつつ、これらの人士が元来やはり李と強く結び付いていたことを示しておこう。

先ず鄭孝胥については、李との邂逅が1906年に遡ることを新たに附言しておく¹⁷。時に李は南京において改組間もない両江師範学堂の監督に就任、一方の鄭は、広西辺防の官を辞し、上海で中国公学の設立に邁進していた。革命後、両者が詩社「一元会」の活動を中心に頻繁に交わるが、その親密は、両者が前清において高等教育行政に深く関与した経歴に少なからず起因しよう。

かかる李・鄭両者と革命直後の上海で対面を果たしたのが惲毓嘉である¹⁸。惲は前清では福建延平知府等の要職を歴任、革命後は上海での売芸を生業とした。その惲と李・曾との集いが、上述の一元会なのかは詳らかにしない。しかし、この折の上海には一元会とは別に「淞社」なる詩社が設立する¹⁹。李と惲は、ともにその一員であった。のみならず、同社には、実は次に述べる徐乃昌や鄭文焯も参加していた。

このうち徐乃昌と李とは、淞社が初対面ではない。徐は、李が両江師範学堂の監督となる直前に、同校（当時は三江師範学堂）の監督であり、1905年、同校のあり方をめぐる研究会で李と徐が顔を揃える記録が残る²⁰。徐は、この折から蔵書家として知られ、革命後も淞社の活動の傍ら、典籍や金石の蒐集とその出版を精力的に行った。その実績が66～71に続く一連の金文拓の拡大影印（95～97）に結び付いたようである。

同じく淞社の鄭文焯は、旧稿1で触れたように、李の薦めに応じず売芸に消極的であった。本稿で新たに附言すべきは、48・88のみならず、震亜が鄭の作品売買に対する仲介（代收）を担っていた点である²¹。このことと、李による売芸の懲慚を勸案すれば、震亜における鄭の登場は、やはり李の主導で進められたと見てよい。

残る胡光燾は李の両江師範学堂監督時代の学生で（旧稿1で既述）、この胡を除く如上の各書人は、革命後の上海に興った詩社への参加者となり、その大半は前清の高官という経歴を有する流寓遺老である。換言すれば、李は曾との排他的な独占に向かわず、自身と同様の境遇に置かれた流寓遺老を敢えて柔軟に受け入れ、言わば「流寓遺老書人群」なる一派・一勢力の拠点を形成したことになる。ただし、これら流寓遺老の震亜における参画はいずれも顕著な比重を占めないが、それも李が主導権を揮う以上、当然ではあろう。むしろかかる新興の書家層の喧伝こそ、この層における李自身の頭目たる役割を鮮明にさせる。李にその効果を期する意図が存したことは想像に難くない。

以上の傾向は、旧稿で着目した震亜の出版物に附載する潤例の内容と、何ら矛盾しない。管見の及んだ附載潤

例を総合すると、李・曾・鄭（孝胥）・惲の他、史甸廩、李健（時惕廬）、胡光燁のそれが確認できる。史の潤例は李が改訂したもので、李健は李の甥、両者とも上海での後進書家となる。附載潤例の点からも、李を中心とした一派の形成は如実に看取される。なお、上述の鄭文焯の例のように、震亜が代收を担った書家も少なくないが、この点については第3章で触れたい。

2. 新参遺老の地歩

旧稿3で述べたように、清末から興起した各出版社の名跡の影印は、古典作品を主たる対象とし、健在書家の作品の加入は稀であった。影印時代に課された喫緊の課題は、一部に秘匿されていた古名跡の公開であり、書画肆を賑わす現下の作品が埒外に置かれるのは当然と言えよう。こうした状況下、社の外部から自身の作品の出版を促し、且つ出版企画さえ主導する書家の事例は、李の震亜参画以前は全くと言ってよいほど窺われない。

1915年、掃葉山房から伊立勳（1856-1940）が石鼓文、華山碑、多宝塔碑、書譜等の臨書を各々相継いで単行出版した事例は、同年に李が震亜で始めた臨書の出版に近いが²²、伊の作品の出版はこれ以降確認できず、掃葉で主導的地位を得た事跡も確認できない。遡って1911年に文明書局から出版された『漢碑範』は、張祖翼（1849-1917）が諸漢碑の集字に基づいて揮毫した対聯の範例集だが、これも当該の単行本に止まり、張が同社で存在感を示したと言うまでには至らない²³。文明は、古書画碑帖の出版では有正書局や商務印書館と並ぶ大手であり、掃葉は書法に限ればその規模は極めて小さく、古典や近世・近代の作品が僅かに影印されるに過ぎない²⁴。

震亜の場合、【表1】の1（樊増祥）、6（張謇）、24、25（ともに鄭孝胥）等は、李以外の往時の健在書人の作品と言える。だが、実はこのうち、鄭の24、25は他社出版物の可能性があり²⁵、一方で2～5、7～10という多数はいずれも古名跡の影印である。畢竟、現代作家の本格的な参入は、やはり李を俟つことになり、そこから震亜は、【表2】のとおり李・曾関連出版物を特化させ、時の出版界で異彩を放つのである。

出版社側が古典影印に傾くのに対し、李の如く書家にして企画・編集を兼ねるような書人の層は、どれだけ充実していたのだろうか。往時、能書の人士は、もとより少なくなかった。奇しくも李は、特にこうした人士より手広く震亜の出版物へ跋を譲り受けており、【表1】では例えば新奇な章草に定評ある沈曾植（1850-1922、11跋）や、石鼓文への着眼で一世を風靡した呉昌碩（1844-1927、11・108跋）、漢隸に熟達した陸恢（1851-1920、11・108跋）、北碑に基づく作風で知られる康有為（1858-1927、13・48跋）や梁啓超（1873-1929、13跋）といった錚々たる顔ぶれが出揃う。これらの人士の書作への関与

のあり方に鑑みることは、李の特異性の由来を鮮明にさせましょう。この際、上掲の人士たちは、大きく二種類の交友圏を形成するように見受けられる。双方は一部の人士を共有する親和性があり、李も双方を跨いで活躍するが、書作へのアプローチは双方で異なる。

第一に、上述の鄭文焯の如く売芸を積極的に標榜しない一群である。その代表は沈曾植であり、彼は実質的に潤筆料を伴う揮毫は多かつたはずだが、潤例を掲げての鬻書は最晩年と言われる²⁶。沈は上述の一元会の常連として李とも頻繁に接し、一方で超社（逸社）という遺老中心の詩社でも活躍²⁷、これら詩社に集う人士は全てが能書家ではないという事情もあるが、潤例を掲げ売芸に与する者は少なく、しかも革命直後から売芸に専心した者は殆ど見られない²⁸。そのことは、清廉を保ち、売芸を潔しとしない通念が、彼等に根強く残ることを窺わせ、李をはじめ震亜に集う曾熙や鄭孝胥、惲毓嘉等は、むしろ例外的な存在であることを浮き彫りにする。李たちが廉節に背く売芸者を自覚しつつ震亜の活動に臨むことは留意されてよい。

一方、康有為や梁啓超は、詩社に集う遺老とは異なり、革命後もそれぞれの立場で政治活動に邁進し²⁹、李とも常時交わっていた訳ではない。ただし、彼等にとっても、やはり書は余技の域に止まり、彼等の書の需要は、その政治上の名声への起因が無視できない。

さて、李をめぐる第二の交友圏は、以上に見た遺老や知識人とは全く相反し、積極的に売芸を生業とした書画家の一群である。呉昌碩や陸恢がその代表だが、清末の上海に設立した豫園書画善会や海上題襟館金石書画会といった書画壇において、呉・陸は領袖的地位にあった³⁰。こうした書画壇に活路を見出そうとする李は、呉・陸よりやや遅れてそこに加わる。1912年、李は海上題襟館金石書画会が主催する古書画展覧会に所蔵品を提供する³¹。他、同年、同会の主要構成員が集う金石古画共覧会へも参加、1914年には王震（1867-1938）等が主催する孤兒院菊花大会でも、李は同会の主要構成員とともに書画の慈善即売に加わっている³²。呉や陸との合作や跋の応酬も、長尾雨山（1864-1942【表1】108に跋）の帰国に際した「海浜話別画卷」（1915年）等をはじめ散見する³³。

では、こうした書画壇に属する專業書画家の層から、特定の出版社を拠点に自作の影印出版に邁進した人物が輩出されなかった点は、如何に理解すればよいだろうか。呉の場合、彼の作品集は生前から頻繁に編まれ、松村茂樹氏の調査によれば、逝去直後までに13件の出版を数えるが、その版元は特定の出版社に集中せず、呉がそれらの企画編集を主導した事跡も確認できない³⁴。陸恢の場合、山水や花卉の作品が有正書局から若干出版されるようだが³⁵、有正が古書画の影印を中心とすることは、既述のとおりである。呉・陸の事例から窺える大きな特

徴の一つは、彼等は画家として評価され、その作品の出版も絵画が偏重されているという点である。この傾向は、如上の書画壇自体に言えることで、その領袖たちの大半は、やはり画業が評価されている³⁶。

往時の絵画偏重の風潮に加え、呉・陸をはじめ如上書画壇の領袖たちが、既に売芸に成功した重鎮であることも留意される。彼等は、李が40代半ばにして、売芸への転向を志すのとは自ずと立場を異にする。呉・陸の一部作品が影印出版に至った事例は、評価の確立した大家の余滴と見做し得、李の如く向後の売芸の成功を期した出版とは同列にできない。逆に言えば、李はこうした大家の後塵を拝する立場にあって、彼等が相応に占有したであろう書画市場に対し、新たに参入する方策が求められていたのである。

以上、李と交わった時の能書家を二つの交友圏に分けて眺望してみた。能書が評価されながら売芸に与しない前清の遺老や知識人の層と、主として絵画で成功を収める専業書画家の層、李は双方の間隙にあって、書法を主とする売芸に専心し、そこで震亜という協力者を得ることになった。しかし、自作の影印出版環境が整ったところで、それが直ちに営業上の成功に結び付く訳ではない。上述の書画市場への新規参入も視野に、李は何等かの策を講じていたのであろうか。

かかる営業上の方策として容易に見通されるのは、先述した臨書作品の積極的公開である。ここにおいて、李が得意とする古典のみならず、歴代の主要古典を遍く涉猟・節臨した【表1】11を震亜への参画当初から供したことは注目に値する。本作は、李がこの出版の前年に手すさびで揮毫したもの³⁷だが、各古典の節臨には、李の短評が跋として添えられ、気軽な習作ながら、自らの古典観を学書者一般へ示す意識が濃厚に感得できる。故に、この11が「中学習字帖」を標榜することも当然と解され、このタイトルの発案も、おそらく揮毫者の李と推察される。

時に学生を対象とした「習字範本」の出版は、大手の出版社でも積極的に展開していた。それらは教科書に準ずるものだが、多くの場合、古典の直接影印が主流であって、李と震亜が企てたような臨書手本は極めて稀であった³⁸。先掲の伊立勲や張祖翼の臨書出版物が、こうした教科書的機能をどれだけ果たしたかは不明ながら、こと11に限っては、管見の範囲で三版を重ねており³⁹、相応の売上実績を示している。結果として李の臨書手本は、購買層の拡充に成功したと見てよく、そこから所期の売芸も、自ずと軌道に乗ったと察せられる。

因みに李は、上海への流寓当初、鄭孝胥が董事を務める商務印書館への奉職も希望していた⁴⁰。この話は頓挫したが、震亜への参画の前後、別の出版社から教科書編集の勧誘もあった⁴¹。それも、両江師範学堂の経営をは

じめとした李の教育行政の手腕を評価してのことに他なるまい。果たして、李はこの話を固辞し、震亜への参画に邁進することになるが、してみると李のかかる教育者的資質こそ、震亜の新機軸に相応の成功をもたらした源泉と称しても過言ではない。李の二つの交友圏、その間隙に然るべき座を占めるためには、李自身の類稀な資質も必要としたのである。

3. 展開しない新機軸

以上のような李の実践、即ち企画・編集を主導し、且つ臨書を中心に自身の作品を陸續と影印する試みは、実のところ、その後に至っても類例を見出せない。旧稿3では、民国期に書画出版を活発化させた芸苑真賞社や求古斎の事例にも少しく触れた。芸苑真賞社が、先行する有正書局や文明書局と同様に古書画碑帖の影印を中心としたことは旧稿のとおりである。一方の求古斎では、汪仁寿編『金石大字典』に汪の潤例が掲載されることから、汪と求古斎の関係に、李・震亜との近似を指摘した。ただし、汪が求古斎で自身の作品を影印した例は僅かで、汪は同社の書画出版を広く主導する立場にもなかった⁴²。『金石大字典』の刊行は1926年。既に李は歿していた時期だが、そもそも震亜にあっては、李の歿後、企画・編集を主導するような後継は育成されたのであろうか。

再び【表1】から、各出版物の出版年代を一望してみよう。そのピークは1921年頃までとして大過なく、その後は書法に関する新刊の出版が頓に鈍ってゆく。1921年は李が急逝した翌年であり、同社の書法出版は、やはり李の余人を以て代え難い個人的資質に支えられていた側面があった。それ故、李の歿後における震亜の書法出版は、一見振るわぬまま収束を迎えるようにも映るが、対して参集書家の動向に鑑みれば、必ずしも李の喪失が彼等を不況に陥れた訳ではない。

先述のように震亜は、出版物を利用して参集書家の潤例を掲げていった。該当の書家から特に若輩・後進たちを例に挙げれば、李の甥の李健は、鬻書の傍ら書名が買われて江南の各大学・美専で教鞭を執るようになり⁴³、同じく李の門下の胡光焯は、李の歿後の翌年、東南大学に国文系の教授として就任する⁴⁴。史甸虞も書家としてのみならず、新設の中国考古会の会員として活躍した⁴⁵。震亜を介して彼等は書家・教育者・研究者として自立してゆくのであり、そのことは、もはや彼等にとって李・曾の如き自作の影印出版による喧伝が、必須の策ではなかったことを予測させるに十分である。

こうした潤例掲出者の前途とともに併せ見るべきもう一つが、震亜による売芸者と購買者との仲介（代收）業務である。先述のように、震亜の代收には存命中の鄭文焯の名も挙がる（1917年）が、その当時、鄭も含め8名であった代收対象書家が、1924年時点では24名に膨れ上

がっている⁴⁶。李の歿後、新刊の発行は退潮に向かうのに対し、売芸者への中継機能は却って向上していたのであり、震亜が参集人士のために売芸拠点としての役割を担った事実は決して無視できない。

こうした売芸者にとっての出版環境の変化は、震亜のみならず時の上海書画界に広く到来したものであった。最後に、1920年代の書画出版の動向に視野を広げ、改めて震亜の新機軸が、後代に展開するモデルになり得なかった所以を考察し、稿を閉じたい。

これまで本稿で取り上げた出版社は、震亜を含め主に単行本で書画作品を影印してきた。これに対し、20年代以降は新聞・雑誌（以下「期刊」）における作品の影印が目につくようになる。これら期刊の発行主体は、本稿の冒頭に触れた書画社団が多く、掲載作品は同一巻号に複数集められ、場合によっては巻号を跨ぐ連載もある。20年代以前も、もとより書画期刊は存した。例えば『神州国光集』や『芸術叢編』は古書画碑帖の豪華なビジュアル誌であったが、本稿が着目するのは、現代書画家の作品を掲載する期刊であり、中でも1922年に創刊された『神州吉光集』は画期的な存在である⁴⁷。

銭病鶴（1879-1944）の主編、上海書画会の発行による同誌は、端的に言って現代書画家のカタログであり、内容は徹して現代書画家の代表作例と潤例で構成される。每期60家前後の作品・潤例が掲載、1925年まで8期が刊行されたことから、往時の上海はそれだけの書画の売芸者を擁したことになる（ただし同一書画家が複数期に亘って掲載される例あり）。自作の販促を望む彼等売芸書画家にとって、同誌は格好の宣伝媒体に他ならず、他面、購買層にとっても有用なツールとなったに違いない。こうしたカタログが定期的に刊行されれば、売芸書画家たちは敢えて既存の出版社を介した自作の刊行に注力する必要はない。即ち、同誌は売芸者本位の新たな出版形態を確立したのであり、換言すれば、売り手側の供給環境整備への貢献が特筆されるのである。

その後、同誌の直接的な後継誌は現れなかったが、この頃から小規模な書画社団が自らの機関誌を発行するようになる。例えば、『金石画報』（葉更生主編・金石画報社刊1925年～）、『鼎鑪』（李歛君主編・巽社刊1925年～）、『芸観』（黄賓虹主編・中国金石書画芸術学会1926年～）等、この時期に並存した期刊では、古書画碑帖の影印と、現役の書画家の作品・潤例とが諸記事・雑説とともに混在する形で掲載されている⁴⁸。これらの事例は、時の書画界の動向を全面的には反映しないにせよ、果敢に新たな社団を結成し、機関誌によって、売芸の宣伝も含め自社の存在を顕示せんとする進取の気性が、当時着実に湧き起っていたことを如実に知らしめる。

翻って、この20年代は、呉昌碩のような清末に活躍した書画家の重鎮も一部はまだ健在であったが、時の担い

手は、清末の重鎮から、出版を戦略的に活用する次世代の層に確実に移行していったと見てよい。新文化運動の隆盛と軌を一にして台頭した彼等の世代からすれば、李の如き革命直後に上海に流れた遺老たちも、もはや過去の年代層である。次世代の担い手が、自らの社団本位で自在に出版を駆使する環境を切り拓いた事実⁴⁹に鑑みれば、既存の出版社に取り入って、そこに社団に類する書家の一派を形成させた李の足跡は、自ずと往時の事例として銘記されることになる。時勢は、李と震亜のモデルを優に追い抜くほど、絶えざる変革の力を漲らせていたのである。

おわりに

李瑞清の震亜図書局における参画のあり方は、なぜ類似の事例が他に見出せないのか—これが本稿の主たる問いであった。それに答えるために、本稿では先ず以下の点に李の震亜参画の独自性を調査により明らかにした。即ち、李個人が震亜の書法出版の企画・編集を主導する立場を築き、臨書を中心とした自作の影印出版によって学書者に購買層の拡充を図ったこと、そこには李の鬻書・売芸による成功が企図されており、延いては曾熙をはじめ一部の流寓遺老の売芸の順調も期して、震亜を彼等売芸者の拠点としたこと、これらは李の震亜参画における独自の成果と言える。

それを踏まえ、かかる李の震亜参画のあり方が、特異なままであり続けた理由をまとめるならば、①清末設立の書画社団を率いた重鎮たちの一群と、②革命後に上海に流寓した遺老を中心とした一群とは、ともに③古書画碑帖の影印を主とする既存の出版社において、自作を売芸目的で影印出版することには消極的であり、一方、④李に続く次世代の書画家たちは、新たに社団を設立し、⑤自社本位の期刊の創出によって、売芸を含め自社を顕示する環境を整え、既存の出版社に頼る必要がなくなったため、となる。

本稿は、稿者の旧稿で言及した、時の書画界の社団と出版界の結び付きの多様な相について、その具体化を進めるべく、上記の①～⑤といった諸要素の明示を試みた訳だが、大局的に見れば、当初は、それぞれ独立した①②③が緩やかに結び付いていたのに対し、その後は④が⑤を生むようになり、社団と出版の一体化への流れが看取できる。李・震亜の事例は、まさに①②③から④⑤へと移ろう中で開花したのであり、その過渡性は、急進的に変貌を遂げる上海書画界の活力を証する一斑として、相応の価値が見出せよう。

ところで、鄭逸梅氏によれば、豫園書画善会を主導した高邕（1850-1921）は、李の売芸の成功を快く思わず、高は李が顔を出す宴席には加わらなかったという⁵⁰。鄭氏はこの逸話を高の「氣量褊狭」として紹介するが、本

稿からすれば、高の妬心は単に李の個人的な成功に対してではなく、①の代表たる高と、②から幾分逸れて①とも売芸を接点に交わる李との、帰属する人脈やネットワークの相違にまで深く根を下ろしたものと捉え得る。この逸話の信憑性には疑問も残るが、①や②の如き人脈・ネットワークにおける親和性や排他性は、李をはじめ時の書画家の動向に直結する重要な視点と予測される。折しも、本稿上梓の2020年は、李の歿後から100年（曾の歿後から90年）に当たる。この節目を機に、今後は上記の視点から、李・曾の新たな評価に向けて、引き続き調査を続けたい。

附記

本稿の執筆に際し、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター、及び公益財団法人書壇院より多大な支援を賜った。この場を借りて心より御礼申し上げる。本稿はJSPS科研費JP17H02291の助成を受けたものである。

註

- 1 清末から中華民国期にかけての書法出版物の概要については、拙著『近代中国の書文化』（筑波大学出版会2009）より「第二章 書の出版」、「專題・近代碑帖影印と出版研究」（『西冷芸叢』2017年11期）、朱艷萍『民国時期書法出版物研究』（河南美術出版社2019）等を参照。
- 2 拙稿「李瑞清の墨縁」（『書学書道史研究』第6号1996）。
- 3 拙稿「李瑞清臨六朝碑四種をめぐって」（『福島大学教育学部論集（人文科学部門）』第59号1995）。
- 4 拙稿「曾熙・李瑞清研究の現在」（『書学書道史研究』第20号2010）。
- 5 曾迎三「清道人年譜（一）～（五）」（『内江師範学院学報』2013年9期、11期、2014年1期、5期、11期、以下「李年譜」と略）、王中秀・曾迎三『曾熙年譜』（上海書画出版社2016、以下「曾年譜」と略）。なお、「李年譜」は旧暦で記し、「曾年譜」は新暦で記す。本稿の表記は新暦に基づいている。
- 6 公丕普「民国前期上海“震亜図書局”書法出版研究」（『書法研究』2017年4期）。
- 7 朱の生年については、曾迎三整理「曾熙題跋選注（六）」（『書法』2010年9期）より「跋清道人『節臨六朝碑四種第四集』」注釈①によった。
- 8 前掲註6 公氏論文では震亜の書法出版物を「碑帖拓本（約11種）」、「歴史名家書法（約20種、うち錢澂墨跡12種）」、「当時書家墨跡（約19種、うち李瑞清作品12種）」と類別している。
- 9 喬氏は往時の社団を「雅集模式」「社団模式」「協会模式」「編集部模式」の四類型で概括されている（喬氏『中国近代絵画社団研究』榮宝齋出版社2009、第四章）。
- 10 曾李同門会の概要については、王辰昌主編『中華民国三十六年中国美術年鑑』（上海市文化運動委員会1948、上海科学院出版社2008翻印）「史料」、前掲註5「曾年譜」より「1930年」条を参照。
- 11 李瑞清「清道人遺集攷遺」（李『清道人遺集』中華書局1939、『近代中国史料叢刊』第42輯、文海出版社1969翻印、黄山書社2011再版）より「朱挹芬書」に翻刻。李定一輯

- 『李瑞清楷行三種』（浙江人民美術出版社1992）より「玉梅花盦臨古自叙」に影印。
- 12 【表1】18の原件は未見。タイトルの「鍾王各帖」における「王」は二王と解した。
 - 13 前掲註5「李年譜」民国4年12月条および「曾年譜」1916年1月9日条によれば、この引の初出は『大同月報』第2巻・第1号とする。李瑞清「清道人遺集佚稿」（前掲註11『清道人遺集』）所収。
 - 14 古漢文の引用は、常用体表記とする。以下同様。
 - 15 前掲註5「李年譜」民国4年9月16日条および「曾年譜」1915年10月24日条が引く同日の譚延闓の日記から、李・曾・譚の革命後の再会が確認できる。なお、譚の日記については、中央研究院近代史研究所の開設サイト「筆墨譚心—譚延闓日記」（URL下記、2019年9月19日披閱）を参照。
<http://digiarch.sinica.edu.tw/tan/>
 - 16 李翊煌の閩歴および臨川李氏の梗概については、呂立忠「書香翰墨濃 詩画齊出衆—清代“桂林臨川李氏”書香世家」（『河池学院学報』2007年3期）を参照。また李翊煌への臨川李氏蔵品の通蔵を窺う一端として、宮大中・宮万瑜「北宋汴京双帖：《淳化閣帖》与《大觀帖》」（『美術与時代』2011年8期）を参照。
 - 17 前掲註5「李年譜」光緒32年2月24日条では、同日の鄭孝胥の日記における李・鄭の対面記事を引きつつ、これを両者の初対面とする。旧稿1（前掲註2 拙稿）で1907年の訂交と指摘したのは、誤りであった。鄭の日記については、中国歴史博物館編・勞祖德整理『鄭孝胥日記』（中華書局1993）を参照。
 - 18 惲の伝として、楊逸『海上墨林』（上海豫園書畫善會1920、文史哲出版社1975翻印）巻3、惲茹辛『民国書畫家彙伝』（台湾商務印書館1986）を参照。
 - 19 淞社の概要については、陳子風「近代海上淞社名人詩稿」（『収蔵家』2007年8期）を参照。また、淞社をはじめ民国初期に上海で設立した詩社については、潘静如「從中心到辺縁：民初“海上流人”的結社或雅集新論」（『中国韻文学刊』2016年1期）を参照。
 - 20 前掲註5「李年譜」光緒31年5月2日、30日、6月5日の各条では、各日の繆荃孫の日記から、繆とともに李・徐が「三江学堂研究会」に集った模様を記している。繆の日記については、繆『芸風老人日記』（北京大學出版社1986、張廷銀・朱玉麒主編『繆荃孫全集』鳳凰出版社2014より「日記」に翻刻）を参照。
 - 21 【表1】48『大鶴山人手写詩稿』附載の「本局代收」では、鄭文焯に加え、李、曾、鄭孝胥、惲毓嘉、左孝同、李健、定香池館の8人の名が掲げられている。
 - 22 伊の臨書影印については、旧稿3（前掲註4）でも少しく触れたが、その内訳は徐昌酩主編『上海美術志』（上海書画出版社2004）「附録二 美術活動紀年」より民国4年7月10日条を参照。
 - 23 ただし、張のこの『漢碑範』は好評だったらしく、高橋佑太氏によれば1937年時点で19版を重ねたという（高橋氏「張祖翼『磊齋金石後編草』初探」『公益財団法人日本主事教育財団 学術研究助成成果論文集』Vol.4 公益財団法人日本主事教育財団2018）。
 - 24 掃葉山房が1917年に重訂した『掃葉山房書目』（韋力主編『中国近代古籍出版發行史料叢刊補編』線装書局2006第20冊）によれば、書法作品の影印は「法帖類」にまとめられるが、伊の臨書4件（前掲註22『上海美術志』と同様の内訳）を含め僅か12件を数えるに過ぎず、内、鄭板橋、劉墉、翁方綱等、清朝名家の作品が目につく。
 - 25 旧稿2（前掲註3）では、鄭孝胥の1915年4月24日の日記

- から、震亜が『瓶賦』『夜気説』を商務印書館より代售するという記述を引いたが、双方は各々25と24に相当しよう。鄭の日記については、前掲註17『鄭孝胥日記』を参照。
- 26 王遽常編『沈寐叟年譜』（長沙商務印書館1938、台湾商務印書館1982翻印）中華民国10年条に「是年公鬻書自給」とある。
- 27 沈の超社（逸社）における活動については、前掲註19潘氏論文を参照。
- 28 前掲註19潘氏論文が掲げる一元会と超社（逸社）の構成員は、重複する者を1名に数えれば47名となる。このうち、王秀中・茅子良・陳輝『近現代金石書画潤例』（上海画報社2004）で、革命後の潤例掲出者として名の挙がる者は、以下の10名（各々同書所掲の再早潤例の年代を添えた）であり、約二割に過ぎない。陳三立（1926）、樊增祥（1924）、吳士鑑（1926）、馮煦（1920）、朱祖謀（1924）、王乃徵（1930）、鄭孝胥（1916）、陳曾寿（1920）章授（1923）、李瑞清（1912）。同書の潤例採録の精度も勘案すべきだが、革命直後から売芸に専心した流寓遺老は稀有と言ってよい。
- 29 革命後、康・梁は亡命先の日本から相次いで帰国を果たすが、康が在野で復辟運動に加担するのに対し、梁は熊希齡内閣で司法総長を務めるなど、新政府に仕える立場を持した。樓宇烈整理『康南海自編年譜（外二種）』（中華書局1992）、吳天任編『民国梁任公先生啓超年譜』（台湾商務印書館1988）等を参照。
- 30 豫園書画善会と海上題襟館金石書画会の設立経緯とこれら書画社团への吳昌碩・陸恢の参画については、拙稿「豫園書画善会と海上題襟館金石書画会—清末上海における書画社团の分立と共存—」（『芸術研究報』第39号2019年）を参照。
- 31 同会主催の古書画展覧会については、「海上題襟館展覧古書画啓」（『神州日報』1912年7月13日）及び王中秀「時間深处的回響（二）：邑廟豫園書画善会与海上題襟館書画会会史合編」（『榮宝齋』2014年6期）を参照。
- 32 金石古画共覧会については、「金石古画共覧会」（『時報』1912年5月23日）及び前掲註5「李年譜」民国元年4月23日条、前掲註30拙稿を参照。「孤兒院菊花大会」については、「孤兒院菊花大会紀事」（『時報』1914年11月8日）、前掲註5「李年譜」民国3年9月20日条、王中秀「時間深处的回響（三）：邑廟豫園書画善会与海上題襟館書画会会史合編」（榮宝齋2014年8期）及び前掲註30拙稿を参照。
- 33 陸恢「海浜話別図」は京都国立博物館蔵。『中国近代絵画と日本』（京都国立博物館2012）、前掲註5「李年譜」民国4年3月条、及び前掲註32王中秀「時間深处的回響（三）」を参照。
- 34 松村茂樹「海上画派の図録類と学画法をめぐって」（『中国文化』第56号1999、松村『吳昌碩研究』研文出版2009第3章「吳昌碩の画譜」として再収）を参照。
- 35 有正書局が影印した陸恢の絵画作品として『陸廉夫人物山水冊』（1917）、『陸廉夫花卉十六幅』（1926）等が確認できる。
- 36 前掲註30拙稿では、豫園書画善会と海上題襟館金石書画会に重複する主導者として、蒲華、楊葆光、倪田、黄山寿、陸恢、王震、何汝穆等を掲げた。これに豫園の実質的な主導者である高邕や、題襟館の総董であった汪洵を加え、彼等の書画の評価を前掲註18『海上墨林』から窺うならば（王震を除く）、書に特化した評価が備わるのは、楊、高、汪の3者に過ぎない。
- 37 【表1】11における李の後跋に「隆熱焔赫、移研竹間、操觚弄翰、聊以送日、何減高臥北窓下耶」とあり、当初の習作が、11に流用されたことを伝える。
- 38 往時の「習字範本」類の手本・教材の出版として、拙著『近代中国の書文化』（筑波大学出版会2009）「第二章 書の出版」では、有正書局における習字範本の書目を掲出した。それら範本の殆どが古典や近世までの書家の作品で占められている。
- 39 管見の及んだ【表1】11の奥付では、初版を民国4年3月、再版を同年4月、三版を同年7月とする（各月は旧暦表記か）。
- 40 この点については、前掲註5「李年譜」より民国2年1月13日条（同日の鄭孝胥の日記）を参照。なお、鄭の日記については、前掲註17『鄭孝胥日記』を参照。
- 41 李瑞清「与某書」（前掲註11「清道人遺集摺遺」所収）は、某出版社からの教科書編集職への招聘を辞退する書簡であり、一節に「去年於江西…」とある。李の江西行は、1914年夏の『臨川県志』編纂と推測される。この書簡はその翌年、即ち李が震亜の書法出版に乗り出した時期のものと思われる。
- 42 求古斎は書画碑帖の出版に注力しており、『魏碑大観』『漢碑大観』『近代碑帖大観』等、作品集を多く手がける。内、『近代碑帖大観』では、李や曾、吳昌碩等、当時健在の書家の作品も収めており、汪仁寿の作品影印が必ずしも突出していた訳ではない。求古斎編『上海求古斎金石書画碑帖図書目録』（同社1927、王燕来編『歴代書画録続編』国家図書館出版社2010第20冊）を参照。
- 43 李健の閲歴については一瓢「光照臨川之筆—記書画家李健先生」（『書法』1998年5期）を参照。
- 44 胡光煒の閲歴については謝建華・周勳「胡小石先生年表」（南京博物院編『胡小石書法文獻』榮宝齋出版社2008）を参照。
- 45 【表1】53附載の史甸廩の潤例によれば、当初、彼の潤例は吳昌碩によって定められ、後に李が改訂したとあり、彼は革命前後から売芸を生業としたようである。史が加わった中国考古会の設立については李奕青「從閩百益画像論“中国考古会”的創立」（『中国国家博物館館刊』2018年9期）を参照。
- 46 その内訳は、【表1】95奥付欄「本局代收書件」を参照。なお、稿者披閱本は民国13年9月初版とするが、【表1】では、他の資料との整合から「1920-」で表記し、初版は民国13年まで下らないものと見た。
- 47 その翻印に『民国書画金石報刊集成』（上海書画出版社2015）上海卷（六）がある。
- 48 『金石画報』『鼎鑿』『芸觀』各誌の翻印に前掲註47『民国書画金石報刊集成』より上海卷（七）（八）がある。
- 49 朱艷萍「民国書画金石報刊概況述略」（前掲註47『民国書画金石報刊集成』上海卷（一））が対象とする金石書画紙誌22種の創刊時期を見るなら、大半が1920年代から30年代中頃に集中している。
- 50 鄭逸梅「高邕之気量狹狹」（鄭氏『逸梅雜札』齊魯書社1985）。

【表1】震亜図書局書法関連出版物一覧

凡例

- 以下は、震亜図書局が出版した書法関連出版物について、管見の及んだ原件の他、同社の出版目録、及び関連の諸資料に記載されるものを、刊行年順に配列した一覧である。なお、一覧には他社の出版物の代售が含まれている可能性もあり、出版予告の記載に基づく出版物は、実際には未刊の場合もある。
- 各出版物は、初めに整理番号を付し、これに続き書名（題名）、刊行年、典拠（出版目録等、当該の出版物の情報を収載した資料）、付載題跋について列記した。
- 書名は、典拠によって同一出版物を若干異なる表記で示している場合がある。特に参照すべき異書名については、（ ）で補った。なお、当初は別個に単行化されていた複数の出版物が後に合冊となる場合（或いはその逆の例）も若干認められるが、それら合冊と分冊の双方が備わる場合は、それぞれを別タイトルとして掲げることにした。また、出版物の末尾に「第二集」等、シリーズを示す出版物についても、各集を別個のタイトルとしている。また、ゴシック体表記は、当該出版物の原件を閲したものである。
- 刊行年は初版を西暦で示したが、多くは正確な年代を確定できなかった。この際、典拠が既刊目録の類であれば、その最早期のものを刊行年の下限と見做し、当該刊行年の前に「-」を付して表記した。逆に典拠が出版予告の類であれば、その最早期のものを刊行年の上限と見做し、当該刊行年の後に「-」を付して表記した。
- 典拠は以下のとおりであり、出版物ごとに用いた典拠の冒頭のアルファベットを[]で示した。なお、目録の類では、当該出版物を著録した最早期のものに限り掲出した。
 A「上海震亜図書局出版及特約書目」（『李梅庵臨漢魏六朝唐宋元明中学習字帖』1915）
 B「本局出版碑帖出版預告」及び「上海震亜図書局出版及特約書目」（『泰山經石峪金剛經墨拓』1916）
 C「本局出版碑帖出版預告」及び「本局出版書籍碑帖小説」（『大鶴山人手寫詩稿小冊』1917）
 D「震亜図書局書籍碑帖小説目録」（『清道人書長沙朱閣學墓碑』1917）
 E「（無題）」（『清道人臨毛公鼎全文』1918）
 F「發售特約」及び「最近出版」（『曾農髯臨黃庭經』1920）
 G「（無題）」（『放大孟鼎』1924）
 H曾迎三「清道人年譜（一）～（五）」（『内江師範學院學報』2013年9・11期、2014年1・5・11期）
 I 王中秀・曾迎三（『曾熙年譜長編』上海書畫出版社2016）
 J 商業図書館『上海總商會商業図書館圖書目録』（上海總商會商業図書館1935、公丕普「民國前期上海“震亜図書局”書法出版研究」『書法研究』2017年4期引）
- 付載題跋については、「跋：」の表記の後に、原件の披閱または典拠から知り得た寄跋者名とその執筆年を掲げた。なお、跋の中には再版以降の出版物に初めて付載するものもあり、各跋の執筆年は、必ずしも当該出版物の初版の上限を示すものではない。

1 樊樊山書著琴樓夢（樊樊山手書琴樓夢）-1915 [A]	跋：曾熙1916、鄭孝胥1916、李瑞清1916	（瓶齋主人藏南園杜工部合冊）1917- [C]
2 董香光書東坡詩真跡 -1915 [A]	16 譚組庵藏錢南園大字楷書（錢南園大楷冊）1916- [B,H,I,J]	30 瓶齋主人藏本南園行書蘇詩冊 1917- [C]
3 王虛舟臨唐宋各種 -1915 [A]	跋：曾熙1916、李瑞清、鄭孝胥1916	31 瓶齋主人藏本南園手札 1917- [C]
4 劉文清真跡 -1915 [A]	17 曾農髯臨西嶽華山碑（曾農髯臨華山碑）1916- [B,H,I]	32 瓶齋主人藏本南園行書冊 1917- [C]
5 梁文莊國史列伝 -1915 [A]	跋：曾熙1916、李瑞清1916、胡光燁1918	33 曾農髯臨墨戲 1917- [C]
6 張季直殿撰臨伊闕仏龕碑 -1915 [A]	18 曾農髯臨鍾王各帖 1916- [B]	34 曾農髯李梅庵臨瘞鶴銘合冊 1917- [C]
7 王夢樓尺牘 -1915 [A]	19 曾農髯臨九成宮醴泉銘 1916- [B]	35 李梅庵先生藏何子貞四種 1917- [C]
8 梁山舟孫安人誄墨蹟 -1915 [A]	20 曾農髯臨化度寺碑 1916- [B]	36 惲孟樂書草千字文（草字千字文、惲孟樂書正草千字文）1917 [C]
9 陳曼生先生真蹟 -1915 [A]	21 李梅庵書六朝墓誌 1916- [B]	跋：惲孟樂1917
10 周山茨太史翁筆溪學士曹宗丞碑伝 -1915	22 李梅庵書張遷碑 1916- [B]	37 惲孟樂書正草千字文（惲孟樂書正草千字文）1917- [C]
11 李梅庵臨漢魏六朝唐宋元明中学習字帖（李梅庵先生選臨法帖）1915 [A,H,I,J]	23 李氏藏夏承碑（臨川李氏藏本夏承碑）1916- [B,J]	38 最近名人書畫摺扇數十種 1917- [C]
跋：吳昌碩1914、李瑞清1914、沈曾植1914、陸恢1915	24 鄭蘇戡先生書夜氣說 -1916 [B]	39 最近名人對聯屏條 1917- [C]
12 李梅庵臨禮器碑（清道人臨禮器碑）1915 [A,H,I,J]	25 鄭蘇戡先生書柳子厚瓶賦 -1916 [B]	40 泰山經石峪金剛經聯語（泰山經石峪金剛經集聯）-1917 [C]
13 清道人節臨六朝碑四種帖 1915 [A,H,I,J]	26 農髯臨鶴銘 1916- [H,I]	41 清道人節臨六朝碑屏 -1917 [C]
跋：李瑞清、曾熙1915、梁啓超1915、康有為1915、鄭孝胥	跋：李瑞清	42 清道人節臨六朝碑冊頁 -1917 [C]
14 清道人節臨六朝碑四種（精品）-1915 [A]	27 錢南園書樂志論 -1917 [J]	43 衡陽王楊貢生墓誌銘（曾書王楊貢生墓誌銘）-1917 [C,I,J]
15 泰山經石峪金剛經墨拓（譚組庵李梅庵藏本泰山經石峪金剛經）1916 [B,H,I,J]	跋：倪文蔚、王仁俊、譚澤闈	44 衡陽王楊氏家伝（曾書衡陽王楊氏家伝）1917 [C,I]
	28 蘭亭序六種合刻（蘭亭三種附鄭李曾寫本、曾李鄭書蘭亭序三種）1917 [C,H,I,J]	跋：曾熙1915、李瑞清
	跋：曾熙1915、李瑞清1915	45 譚組庵藏春及草廬翁帖墨蹟 -1917 [C]
	29 瓶齋主人藏本南園先生行書杜詩冊	

- 46 譚組庵藏何子貞臨黑女志（瓶齋藏何子貞臨黑女志）-1917 [C]
- 47 臨川李氏希世十宝裱好全十冊外木箱（臨川李氏藏本希世十宝裱好）-1917 [C]
- 48 大鶴山人手寫詩稿小冊 1917 [D,H,J]
跋：鄭文焯、康有為1916、李瑞清1917
- 49 清道人書長沙朱閣學墓碑（李梅庵書朱雨田墓誌銘）1917 [D,H,J]
- 50 彭君墓誌銘（李梅庵書彭君墓誌銘）-1918 [E]
- 51 傅君生壙墓誌 1917- [J]
- 52 曾書阮君墓誌銘（曾農髯書阮君墓誌銘）1917- [E,I]
- 53 清道人臨毛公鼎全文（李梅庵臨毛公鼎）1918 [E,H,I,J]
跋：李瑞清1916、曾熙1918、胡光燁1918、桂紹烈·趙憲·朱亮
- 54 錢南園先生大招鵬賦楷書（竹香山房藏南園楷書鵬賦冊大招策兩本）-1918 [I]
- 55 錢南園杜詩蘇詩合冊 1918 [I]
跋：曾熙1918、李瑞清1916、胡光燁1918、李健、譚澤闈1918
- 56 清道人篆書小對聯未裱 -1918 [E]
- 57 清道人隸書小對聯未裱 -1918 [E]
- 58 清道人書五尺魏碑對聯數種做古宣片 -1918 [E]
- 59 清道人書四尺魏碑堂幅數種做古宣片 -1918 [E]
- 60 曾農髯書清道人畫扇面合冊第一集 -1918 [E]
- 61 曾農髯隸書小對聯未裱 -1918 [E]
- 62 曾農髯書五尺對聯數種做古宣片 -1918 [E]
- 63 曾農髯書四尺堂幅數種做古宣片 -1918 [E]
- 64 曾農髯臨夏承碑 -1918 [E,H,I,J]
跋：曾熙1917、李瑞清1918、胡光燁1918
- 65 曾農髯臨漢碑四種屏 -1918 [E]
- 66 曾農髯清道人審定放大毛公鼎 -1918 [E,H,I,J]
跋：胡光燁1918、曾熙1918、李瑞清1918
- 67 曾農髯清道人審定放大秦權量詔版景大（放大秦權量）1918 [E,I]
跋：胡光燁1918、曾熙1918、李瑞清
- 68 曾農髯清道人審定放大秦量刻辟硃色堂幅 -1918 [E]
- 69 曾農髯清道人審定放大克鼎 -1918 [E]
- 70 曾農髯清道人審定放大齊侯壺 -1918 [E]
- 71 曾農髯清道人審定放大孟鼎 -1918 [E]
- 72 曾農髯清道人題跋翁方綱臨化度寺 -1918 [E,I,J]
跋：曾熙、胡光燁1918
- 73 曾農髯臨黃庭經玻璃版 -1918 [E,H,I,J]
跋：曾熙1916
- 74 臨川李氏藏米南宮書方圓庵記 -1918 [E,J]
- 75 李梅庵先生小真書祝君墓誌銘 -1918 [E,H,I,J]
跋：曾熙1918、胡光燁1918
- 76 李春湖侍郎臨孟法師碑 -1918 [E]
跋：李翊煥1918、李瑞清、曾熙1918、胡光燁1918
- 77 瓶齋主人藏南園行書 -1918 [E]
- 78 瓶齋主人藏南園秋懷詩 -1918 [E,J]
- 79 瓶齋主人藏南園蕪城賦 -1918 [E]
- 80 瓶齋主人藏南園陰枯樹賦 -1918
跋：譚澤闈1919 [E,J]
- 81 劉文清書袁君墓誌銘 -1918 [E,J]
- 82 鄭孝胥書楊使君墓誌銘 -1918 [E,J]
- 83 臨川李氏藏本希世四宝裱好 -1918 [E]
- 84 臨川李氏藏本宋拓元靖碑 -1918 [E]
- 85 謝公墓志銘（李書謝公墓誌銘）1918- [H,J]
跋：李瑞清1918
- 86 傅母危太夫人墓志銘 1918- [H]
跋：李瑞清1918
- 87 湘綺樓詞鈔 1919 [I,J]
- 88 鄭叔問尺牘 1919- [H,I,J]
跋：曾熙1918、陳三立1919、李瑞清1919、惲毓嘉1919、朱孝藏、呂景端1919、譚澤闈1920、馮煦1920、趙愷1918
- 89 石庵相國墨寶 1919- [I,J]
跋：曾熙1919
- 90 明李文正公墨跡 1919- [I]
跋：曾熙1919
- 91 衡陽丁烈婦伝 1919 [H,I,J]
跋：曾熙1919、李瑞清
- 92 史君生墓誌 1919- [I]
- 93 清道人節臨六朝碑四種 第二集 1920- [H]
跋：李瑞清、曾熙1920-、譚澤闈
- 94 泰山經石峪金剛經集聯 第二集 1920- [F]
- 95 徐積餘藏孟鼎（放大孟鼎）1920- [F]
跋：李旭君1924
- 96 徐積餘藏克鼎 1920- [F]
- 97 徐積餘藏齊侯壺 1920- [F]
- 98 倪鴻書四尺堂幅 六吉宣 -1920 [F]
- 99 八大山人四尺立副 六吉宣 -1920 [F]
- 100 清道人五尺篆隸屏 六吉宣 -1920 [F]
- 101 傅青主四尺行書立幅 六吉宣 -1920 [F]
- 102 明李東陽行書冊 -1920 [F]
- 103 旧館壇碑 1920- [I,J]
跋：曾熙1920
- 104 道人拓大散盤 1920- [I,J]
跋：曾熙1920
- 105 衡陽令趙君表頌 1920 [J]
- 106 胡小石輯金石蕃錦集 第一集 1921 [H,I,J]
跋：曾熙1918、李瑞清1918
- 107 胡小石輯金石蕃錦集 第二集 1921 [I]
- 108 清道人致程雪樓書札（清道人手札）1921 [H,I]
跋：曾熙1921、吳昌碩1920、趙士鴻1920、馮煦1920、潘飛聲1914、仇繼恒1914、長尾甲1914、陸恢1914、高英1915
- 109 鍾君繼室李夫人墓誌 1921 [I]
- 110 清故廩生李君之墓誌銘 1921 [I,J]
- 111 清故萬州牧向君之碑 1921 [I]
- 112 劉文清真跡精品 1921 [I,J]
跋：曾熙1920
- 113 清道人座右銘（李瑞清座右銘）1921 [I,J]
跋：李瑞清1918、曾熙1921
- 114 芸海樓金石文字 1922- [I,J]
跋：曾熙1922、李健1922
- 115 清道人書黑女志（李瑞清臨張黑女墓誌）1922-
跋：魏繇1904、曾熙1922 [H,I,J]
- 116 精選縮印泰山經石峪金剛經最大字本 -1924 [G]
- 117 劄光祿公神道碑 1924- [I,J]
- 118 清道人節臨六朝碑四種 第三集 1928- [I]
跋：曾熙1928
- 119 清道人節臨六朝碑四種 第四集 1928- [H]
跋：曾熙1929、譚澤闈1928
- 120 錢南園大楷冊 第二集 -1930
跋：譚澤闈1924
- 121 錢南園論坐帖 1930 [I,J]
跋：曾熙1918、李瑞清1918
- 122 孟法師碑 -1935 [J]
- 123 李書萊陽伍太宜人墓誌銘 -1935 [J]
- 124 李書許君墓誌銘 -1935 [J]
- 125 清道人臨鶴銘 -1935 [J]
- 126 李西涯墨迹 -1935 [J]
- 127 曾熙書金剛經 -1935 [J]
- 128 南園楷書鵬賦冊 -1935 [J]
- 129 南園楷書大招策 -1935 [J]
- 130 南園行書韓詩 -1935 [J]
- 131 南園書百家姓 -1935 [J]
- 132 南園書洞庭春色賦 -1935 [J]
- 133 南園書中山松醪賦 -1935 [J]

【表2】 震亜図書館における書法関連出版物の責任者別内訳

李瑞清・曾熙	65件	48.9%
譚延闓・澤闓所蔵品を含む錢澧作品	22件	16.5%
李宗瀚旧蔵古典	7件	5.3%
その他	39件	29.3%
計	133件	100%

【表1】の133件の出版物に基づき、責任者別の当該出版件数（左欄）と、その全出版件数比（右欄）を示した。

【表3】 震亜図書館における李瑞清・曾熙責任者出版物の内容別内訳

臨書	25件	18.8%	李・曾共同	2件	1.5%
			李	14件	10.5%
			曾	9件	6.8%
審定・所蔵古典	10件	7.5%	李・曾共同	7件	5.3%
			李	3件	2.2%
碑誌	18件	13.5%	李	7件	5.3%
			曾	11件	8.2%
各種創作等	12件	9.1%	李・曾共同	1件	0.8%
			李	7件	5.3%
			曾	4件	3.0%
計	65件	48.9%			

【表2】において李・曾を責任者とする65件の内訳を示した。「李・曾共同」は、単一出版物において李・曾がともに責任者として加わるものを指す。

Summary

Li Ruiqing's Involvement in Calligraphy Publication at Zhenya Tushuju: Sales Strategies for Artworks by Retired Bureaucrats of the Qing Dynasty Who Immigrated to Shanghai

KANNO Chiaki

Li Ruiqing (1867-1920) was a calligrapher who played a major role in the late Qing Dynasty and the early days of the Republic of China. Li involved himself in the publication of calligraphy works at a publisher named Zhenya Tushuju. His way of involvement at the publisher was unique, with no similar cases observed among other publishers of the time. The objective of this paper is to find out the reason behind this.

Li maintained relationships with a group of leaders of painting and calligraphy associations founded during the late Qing Dynasty as well as with a group of people around retired bureaucrats of the Qing Dynasty who immigrated to Shanghai after the revolution. Those who belonged to the respective groups were, unlike Li, rather reluctant to sell their artworks in the form of photographic reproductions to be published by existing publishers, whose major activity was to publish photographic reproductions of gushuhuabeities (ancient paintings, calligraphies and rubbings). Those painters and calligraphers who belonged to the next generation following Li also didn't need to be dependent on existing publishers because they established their own associations and created an environment in which they could represent themselves, including sales of their artworks, by starting magazines on their own initiative.

It is considered that due to these background situations, the way of Li's involvement in Zhenya Tushuju remained distinctive in the world of painting and calligraphy of the time.